

## おわりに

児童玄関前にある「巣立ちの像」です（写真1）。附属中で教鞭をとっておられた彫塑家でもある山瀬晋吾氏の作品です。長い間に風雨に晒されひび割れ等が目立つようになっていましたので、今年、補修作業を行い、きれいに修復されました。

子どもたちが未来に力強く羽ばたいていくことを願ったこの像には、校訓である「すすんで学ぶ子」「やりとおす子」「みんなのことを考える子」がかかれています。

「すすんで学ぶ子ども」とは、自らが学び手であるという意識を持った子どもです。教師は、子どもたちが、学習の主体者となり、学習課題の解決に向けて一人一人が自ら取り組む姿が見られる授業を行います。教師は、授業にお

いては脇役とならなければなりません。脇役に徹する教師とは、子どもたちの思考に沿った授業展開ができる教師のことです。一人一人のよさや可能性を見抜く力、教科等に関する高い指導力、自己研鑽に励む力を身につけた教師のことです。

「すすんで学ぶ子ども」とは、学ぶことに対して「謙虚」である子どもであり、「聞く姿」に表れます。教師は、友だちの考え・思いを「聞かせてほしい」と思える授業、「聞いてよかった」「聞くことで深まった」との思いを抱かせる授業を行います。

さらに、附属小における「すすんで学ぶ子ども」を目指す授業とは、教科等の専門性を生かした授業であり、子どもたちの思考力・判断力を高め、豊かで確かな表現力を育む授業であり、指導案に主張があり、かつ研究実践の具体化として提案性のある授業のことです。

したがって、教師は、経験年数が何年であろうと、子どもたちの前では、一授業者です。教師は、授業で勝負します。言い換えれば「授業を真ん中」にします。毎日の実践に埋没することなく、実践から学ぶ姿勢を持ち、研究で身を立てる意気込みをもってほしいと考えます。

本校の教師集団は、謙虚にていねいに、授業を「反省」することで、研究を進めて参りました。今後も、具体的な子どもの姿をもとに、「授業を真ん中に」することで、本校の研究は、さらなる前進を期待できます。

また、授業構想、子どもの学ぶ姿、教師の行為等をごらんいただき、皆様方の忌憚のないご意見・ご指導を頂くことも、本校の研究推進に欠かせません。今後ともご指導の程よろしくお願い申し上げます。

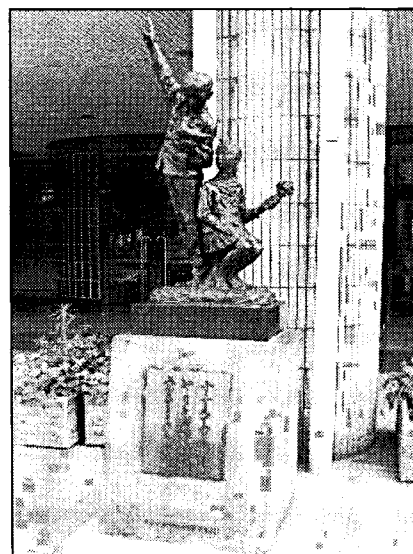


写真1 巣立ちの像

